

## 魔法の子

「アリアア？」

その夜。闇に沈む魔導師の木の中を、一人の少女がそう言って歩き回っていた。

「ノウア？」

居間を見渡す。発着場の扉窓から、仄かな月光が差し込んでいる。斜めにしまわれた椅子。崩れた手紙の筒の山。それ以外、誰かがいた形跡はなかった。

少女は、笑みを浮かべた。いつも通りの夜だったが、それが少女の望んでいたことだった。だれもいない。思いつきり羽を伸ばして、好きなことができる。

彼女は、意気揚々と居間を出た。

魔導師の木は、中央部がくり抜かれており、そのまわりに、部屋へと続く扉や階段があった。だが、居間から少女の部屋へは、そのどれも使わなくて済んだ。なぜなら、同じ階の反対側にあるからだ。

自室に戻ると、少女は扉を閉めた。

「エラドルス、どこにいるの？」

小声で闇に話しかける。奥にまあるくあいた大きな窓がある。少女のお気に入りである、木の洞窓だ。その手前には、木が繊維をからめて作り出したかのような

な、立派な籠型寝台があった。これも、少女が特注したものだ。もちろん、魔導師ノウアに。

そして、その寝台の下に、呼びかけた者がいるはずだった。猫が入れるくらいの小さな穴が、そこにはあり、エラドルスの寝床になっているのだ。

だが、出て来たのは、青白い炎だった。少女は悲鳴を上げたが、いつものことだったので、急いで布を持ってきて、叩いて消した。

「……主人を八つ裂きにしたいわけ？」

座り込んだ少女の前に、一匹の青い竜が姿を現した。小さな三角頭に、長い首、そして、体を包むほど大きな翼を、彼は持っていた。

少女は、その鱗まみれの額をはじいた。

「今日はこれで勘弁してあげる。さあ、さっそく取りかからなくちゃ」

彼女は、棚を開け、しまっておいた石灯いしひを取り出した。とたん、部屋の様子があらわになった。

真っ赤な絨毯、壺、鳥の羽、ガラス瓶、小柄な鏡台に、折れ曲がった本。そして、少女の燃え上がる赤髪が、光の中に浮かび上がった。

青竜エラドルスは、石を爪でひっかくような鳴き声を上げ、主人が天井の傘に石灯いしひをつけるのを、傘に乗っかって見守った。少女の目は、光を受けて、爛々と紫に輝いた。

「さあ、今日で、この目もおさらばよ。魔導師アートウナは、見習いになるんだから！」

足の裏で壺を挟んで固定し、アートウナは、尾羽を慎重に切り刻み始めた。「猛禽シェイスパールの尾羽は、目の色を変える薬に重要な材料です」と、傍らにある『魔導師の薬の作り方〜初歩から完璧！〜』に書いてある。

アートウナは、本をのぞき込みながら、緑色のシェイスパールの尾羽を、次々切っていた。

それから、壺を金属はさみで挟んで、エラドルスの口元に持って行く。エラドルスが放火して尾羽が焦げた頃に、ノウアの部屋からくすねた、〈変色啄木鳥カトリトツルガリーエ〉の血液と怠グヶ山リッとホという小型の河馬の尿を入れる。

悪臭が部屋に広がったが、アートウナはやめなかった。この苦境を乗り越えずに、自分の願いはかなえられない。

(あたしは見習いになる、見習いになる、見習いになる)

念じるように、少女は壺をかき混ぜた。エラドルスはあまりの臭さに、寝床にひっこんでしまったが、アートウナは混ぜ続けた。

ノウアの背中が脳裏に浮かぶ。

彼女が術を唱える瞬間も、もう何べんも見てきた。そして、魔法動物たちの断末魔の叫びも。

小さなアートウナは、耳を塞いだ。自分の悲鳴と魔法動物の悲鳴が重なる。それから、アベドたちの戦々恐々とした顔が周りをとりまいた。彼らは言った。「ありがとうございます」。それから、額を地面につけた。戦慄で体を震わせながら。その伏せられた顔の中で、彼らは低く言った。

「殺し屋と魔導師に、違いはあるのか？」

黒くなるまで練り混ぜられた壺の中のもの、やがて青、紫、金色に変わり始めた。

アートウナは、なめらかになるまで、混ぜ続けた。

もう失敗は、許されなかった。

匙から、さらさらと夕陽色の液体が落ちた。完璧だった。アートウナは、匙を口に近づけた。

とたん、部屋の戸が叩かれ、匙をおっことした。絨毯と脚に葉がこぼれ、アートウナは叫んだ。

「アートウナ、いるの？」

アリイアの声だ。叫んでしまっただけは居留守が使えない。アトウナは、「なにっ!？」と乱暴に答えた。

「話があるの。鍵を開けてくれない？」

「忙しいんだけど」

言いながらアトウナは、いましかない、薬を掬って口に入れた。と、刺すような刺激が口内を貫いた。

「かっ!」

吠えながら、慌てて布を口に押し込む。舌に棘が何千本も刺さっているみたいだ。喉にもそれはやってきて、アトウナは叫んで咳き込んだ。

「ちょっと、なにやってるの!？」アリイアは、切迫して扉を叩いた。

「な、でも、ない」

アトウナは言ったが、言葉になっていなかった。そのうち、扉が開錠された。

アトウナは歯ぎしりした。アリイアめ、術を使ったわね。

入って来たのは、だが、長身の女ではなかった。赤紫色の猫だった。

「なにをしたのよ!」

猫は毛を逆立て、散らばる道具から瞬時に状況を把握した。

「目の色を変える薬を作ろうとしたのね。砂糖は入れなかったの？」

「砂、糖!？」

アートウナは咳き込んだ。だが、猫の丸い手に肩を殴られ、よろけた。その瞬間、猫はなにかを呟いた。すると、口の中にいた棘たちは、ゆるゆるとどこかへ消えていった。

「おさまった？」

アートウナは咳をして、口を舐めたが、もうあの刺激はほとんどなくなっていた。

「砂糖が刺激を中和するって、ちゃんと書いてあったでしょう」

猫は、本に屈みこんだ。

「アリア、なんでシャーナに喋らせているの」

シャーナと呼ばれた猫は、顔を上げた。

「私、いま、狩りの村にいるの。けれど、用事があったから、このシャーナを向かわせたわけ。いま、話せる？」

有無を言わせない言い方だった。アートウナは、ぐるっと目を回し、口を拭いていた布を折りたたんだ。

「いいよ」

「葉の村で、マノという四歳の子が療養しているの。その往診を、一緒にやらなにかと思って」アリア・シャーナは言った。

「それって、ノウアが見つけた新しい呪いと関係あるの？」アートウナは腕を組

んだ。「原因の魔法動物、まだ見つかっていないっていうじゃん」

「ノウアから聞いたの？」

「手紙でね。今日の修行が延期になった理由が、それってこと」アトウナは、そっぽを向いた。

「ノウアも、好きであなたを一人にしているわけじゃないわ」

「知ってる。わかってる」

「だから、今回の件を誘うことにしたのよ。マノは、魔法動物に憑りつかれてい  
る可能性が高……」

「それを殺すってこと？」

アトウナは、静かにシャーナを見つめた。

シャーナは、口を舐めた。

「なんの魔法動物が降りついているか、調べるだけ。彼女、夜に暴れ回って、寝  
付けないのよ。朝になると、記憶は飛んでしまうし。早く原因を突き止めてあげ  
ないと、彼女が疲弊してしまうわ。命の危険も迫っているのよ」

アリアの声は、遠く聞こえた。ノウアが術を叫ぶ声が耳に響く。

「まともじゃない……」

後ろで名もなきアベドが言った。「まともじゃない！」

灰になった魔法動物が雨となって降り注いだとき、ノウアと仕事人との間に

は、壁が作られていた。小さなアートウナは、理解した。ずっと追いかけてきた師の背中が、みんなが畏怖し、嫌悪する背中だったと。

あたしは、あれになる。その道は、確実に前へ伸びている。逃れることはできない。

でも、それならいったい、自分の価値はどこにあるのだろう。アートウナは、まだそれを見つけれられていなかった。

「ねえ、嫌なのは……よくわかるわ」

シャーナが言った。アートウナは、物思いから覚めた。

「けど、いつまでも引きこもってるわけにはいかないじゃない。たまには、外に出るのもいいことよ。魔導師としてではなく、この島に住むアベドとして、エイネーのことをもっと知るべきよ」

「どうかな。あたし、結構知っているよ」

「あなたが知っているのは、本の中のエイネーよ、本物じゃない。……確かに、いろんなアベドがいるわ。でも、私たちのことを心から慕ってくれるアベドもいるのよ。あなたはまだ、本に例えるなら、エイネーという本の、一頁の一行目しか見ていない。外はすごく広い。あまりにも広くて、自分がどこにいるのかわからなくなるくらい。……ね、アートウナ、まだ知らない楽しいアベドが、外にはたくさんいるのよ」

シャーナはじつと、大きなこげ茶の目で見つめた。アトウナを説得させるまでここにいるつもりなのが、その目から伝わってきた。

「……はあ。わかった、行く。……けど、魔法はあんま使いたくないの」

シャーナは、三角の耳をぴくんと動かした。あまり納得していなかったが、やがてこう言った。

「……わかったわ。でも、最低限、自分の身は自分で守るのよ。行く日になったら、知らせるから」

シャーナは一度身震いすると「ニャオウ」ともとの声で鳴き、寝台へひとつ飛びした。そして、音も立てず、窓から出ていった。

アトウナは、ため息をついた。

穴の寝床で静かにしていたエラドルスが、窓辺に飛び乗った。彼は、歯を剥き出し、唸り声をあげた。